

アウグスティヌス『告白』における
アカデミア派懐疑論の二重の役割

山田 庄太郎

『宗教学・比較思想学論集 第12号』抜刷
2011年3月 筑波大学宗教学・比較思想学研究会 発行

アウグスティヌス『告白』における アカデミア派懐疑論の二重の役割

山田 庄太郎

1 はじめに

本稿の目的は、アウグスティヌス (354–430) の著作『告白』 (ca. 400) を基に、彼の思想形成過程においてアカデミア派懐疑論がいかなる役割を果たしていたかを明らかにすることにある。

『告白』の中でアウグスティヌスは自らの青年時代を回顧し、マニ教の教師ファウストゥスとの邂逅と彼への失望に続いて、アカデミア派懐疑論への傾倒を語る (*Conf.*, 5, 10, 19)。また彼は、ミラノへと移りアンブロシウスの説教の聴衆の一人となった当時の自らを、このアカデミア派懐疑論の影響下にあるものとして位置づけている (*Conf.*, 6, 4, 6; cf. *ibid.*, 18)。

この時期は、未だキリスト教への回心には至っていないが、マニ教への熱意が薄れ、新プラトン主義との邂逅 (*Conf.*, 7, 9, 13 sq.) とキリスト教への回心 (*Conf.*, 8, 7, 16 sq.) がそれに続く、彼の思想形成過程上の一大転機ともいえる時期であり、その中でアカデミア派懐疑論への同調が描かれていることは決して小さくない問題である。

しかしながら新プラトン主義の影響に比べて、これまでアウグスティヌスの思想形成過程におけるアカデミア派の影響を扱った研究は少なかつたように思われる。恐らくこれは、回心後の最初の著作『アカデミア派駁論』(386) や晩年の大著『神の国』(413–426) 等でアウグスティヌスが繰り返しアカデミア派の懐疑主義に対して反駁を加えていることに由来するであろう。

実際、『アカデミア派駁論』の英訳者である O'Meara (2001 [1954], pp. 102–106) さえも、アウグスティヌスは懐疑主義に同調したものの、それはあくまで (マニ教と同じく) 克服されるべき一時の誤りに過ぎず、『告白』執筆時には既に重要な問題ではなくなっていたとの見方を示している¹。

だが一方で Lancel (1999, pp. 95–96) のように、アカデミア派の蓋然説が、少なくともほぼ 10 年に亘り悩まされてきた [マニ教の] 誤謬から本筋に戻る助けとなったとする指摘もある。Lancel はその根拠として、以下で採り上げる『告白』5 卷 14 章 25 節の一節を引用するのみであるが、アカデミア派のテキストを読み込んだことが「ローマ・ミラノ期のアウグスティヌスの霊的進歩において重要な段階」であったとする彼の指摘は考慮に値するものであろう²。

アウグスティヌスとアカデミア派との関係に対するこの相反する研究者の評価は、恐らく、『告白』でアカデミア派に与えられた両義的役割に基づいたものであるように思われる。本稿は、従来見過ごされてきた『告白』におけるアカデミア派懐疑論の両義的な性格を描き出すことを通して、アウグスティヌスの思想形成過程におけるアカデミア派懐疑論の意義を明らかにしようと試みるものである。

2 アカデミア派の三つのテーゼ

アウグスティヌスはアカデミア派についての哲学史的知識を、ギリシア語の原典からではなく、主としてラテン語著述家から得ている³。従ってアカデミア派それ自体についての今日の理解と彼の理解は必ずしも一致しない。従って我々はまず彼の理解した限りでのアカデミア派がいかなる学説を主張する人々であったかについて確認することにした。

プラトンによって創設された学校アカデミアにその名の由来を持つアカデミア派は、学説上の特徴から、既にヘレニズムの時代において三つ、ないし五つの時代に区分された。2世紀末から3世紀初頭に活躍したギリシアの懐疑主義者セクストス・エンペイリコスは、アカデミア派の系譜上の区分として、プラトンを中心とする古アカデミア派(第一アカデミア派)、アルケシラオスを中心とする中期アカデミア派(第二アカデミア派)、カルネアデスとクレイトマコスを中心とする新アカデミア派(第三アカデミア派)から成る三区分と、それにラリッサのフィロンとカルミダスを中心とした第四アカデミア派とアンティオコスを中心とする第五アカデミア派を加えた五区分とを伝えている(Sextus, *PH*, 1, 220)。同様の区分はエウセビオス(ca. 263–339)にも引き継がれた(Eusebios, *EP*, 14, 4, 12–16; 5–9, 3)。

一方、キケロはその著書『アカデミカ』の中でアルケシラオスに始まりラリッサのフィロンに至るアカデミア派をその懐疑主義的特長から、古アカデミア派に対して新アカデミア派として区分している(Cicero, *Acad. post.*, 12, 46)。

アウグスティヌスもまた、中期アカデミア派という区分を用いることもあるが(*CA*, 3, 18, 40)、基本的にはアルケシラオス以後を懐疑主義によって特徴づけられる新アカデミア派として規定する(*CA*, 2, 6, 14)⁴。

ではその学説上の特徴はどのようなものであるのか。『アカデミア派駁論』の中でアウグスティヌスはアカデミア派の主張を次のように要約している。

実際、アカデミア派の人々は、哲学に属する事柄に関する限り、その知識に到達することは人間には不可能であるという考えを抱いていた。……しかしまた他方で、人間は知者でありうるし……知者の為すべきことの全ては真なるものの探求にあるという考えを抱いていた。そしてここから、知者はいかなる事柄に対しても同意すべきではないことになる。というのもし不確かなものに彼が同意するなら彼が誤ることは必然であり、それは知者に相応しくないからである。(CA, 2, 5, 11)

ここで彼はアカデミア派の主張として (1) 把握不可能性の主張、(2) 同意差し控えの勧告の二点を提示している。彼によれば、こうしたアカデミア派の主張はストア派との論争から生じたものであった。そしてこの論争からアカデミア派の第三の論点が登場することになる。

ここから両者の間に激しい敵対心が燃え上がった。いかなるものも是認しない人は何も為さないということが帰結するように思われたからである。……そこで彼ら [=アカデミア派の人々] はある種の蓋然的なもの *probabile*——彼らはそれをまた「似真的なもの *uerisimile*」と名付けた——を導入し、決して知者が義務を為さないでいるということを承認しなかったのである。というのもアカデミア派の人々は、知者は自らが従うところのものを有しているが、真理は本性の持っている何らかの暗さとか事物の持っている相似性のために見えなくなったり混同されたりして隠されており、いわゆる同意の差し控えはまさしく知者の偉大な行為である、と主張したからである。(CA, 2, 5, 12)

ストア派との論争はアカデミア派をして蓋然的なものについての議論の展開を促し⁵、認識論上の二つの主張に加えて、倫理上の (3) 蓋然説を齎した。このようにしてアウグスティヌスはアカデミア派をその三つの特徴的な命題から捉える。注目すべきは、上掲二つの引用において彼が (1) から (2) が、そしてまた (2) に対する批判に答える形で (3) が導出されると看做している点である。従って三つの命題は彼にとり、最終的には (1) に還元されるものであったと言えよう。

こうしたアウグスティヌスのアカデミア派理解を踏まえた上で、次に我々の関心事である『告白』におけるアカデミア派への言及について見てみることにしたい。

3 『告白』におけるアカデミア派への言及

『告白』におけるアカデミア派への言及は、同書 5 巻から 6 巻にかけて見出される。

3.1 『告白』第 5 巻——アカデミア派の肯定的側面

5 巻では 29 歳当時のアウグスティヌスの姿が描かれており、カルタゴでのマニ教教師ファウストゥスとの面会と彼への失望、カルタゴからローマそしてミラノへの転居とミラノでのアンブロシウスとの出会いが語られている。

キケロの『ホルテンシウス』⁶により知恵への愛を燃え立たされ (*Conf.*, 3, 4, 8)、キケロの荘重さに比べた聖書の文体の単純さに失望し (*Conf.*, 3, 5, 9)、マニ教に対してより理性的なキリスト教信仰を求めたアウグスティヌスにとり (O'Connell, 1969, p. 53)、この頃には哲学者達の自然学的知識とマニ教の提供する可感覚的世界についての教えとの間の矛盾が次第に決定的なものとなりつつあった (*Conf.*, 5, 1-3)。そして彼は、周囲の

薦めもあり、その調和をローマ帝国内のマニ教の司祭であり指導的人物の一人であったファウストゥスに求めたのである⁷。

しかしいざ面談が許されると、ファウストゥスは確かに「感じが良く、弁舌爽やかで、人々がいつも述べていることを人々よりも一層心地良い仕方で語る人」ではあったが (Conf., 5, 6, 10)、「キケロのいくつかの演説と、ごくわずかのセネカの書と、若干の詩人の著作や自派のラテン語で書かれ良く整えられた作品」を知るに過ぎず (Conf., 5, 6, 11)、期待は裏切られる⁸。

このファウストゥスとの面会の結果、既に9年間に及んだマニ教に対する情熱は失われ、マニの書物が語る日月星辰についての「長たらしい作り話」 (Conf., 5, 3, 3; 5, 7, 12) はマニの説く他の教説についての疑念を生じさせることになったという (Conf., 5, 5, 8)。

このようにファウストゥスとの邂逅は、『告白』の中で、マニ教の誤謬からの離向の契機として描かれている。そしてその後アウグスティヌスは修辞学の教師としてローマに移り、そこからさらにミラノへと赴いて、同地で時のミラノ司教アンブロシウスを知ることとなる。アカデミア派という言葉が同書において最初に用いられるのは、こうしたマニ教とキリスト教という二つの回心の間の信仰の動揺期においてである。

カルタゴでのファウストゥスとの出会いの後、ローマに移った自らの状況を、そしてまたアカデミア派についての当時の考えをアウグスティヌスは次のように記している。

私は未だマニ教徒の選良者達との交際を続けていたが、自分があの偽りの教えの内へさらに進み行くことが出来るということには絶望していたのであり、何かそれよりより良いものが見つからないのならその教えに満足しようとしていたのであって、既に熱意も関心も薄れた仕方で留まっていたのである。というのも、全てのものを疑わねばならぬと考え、真なる何かが人間によって把握されることは出来ないと主張する、アカデミア派と呼ばれるあの哲学者達の方がより賢いという考えが私に生じたからである。(Conf., 5, 10, 18-19)

ここではマニ教に対する懐疑がアカデミア派の懐疑主義と明確に結び付けられている。そして、こうしたアカデミア派的態度は、ミラノでアンブロシウスと出会った当初にも継続しているものであった。

しかし〔アンブロシウスの説教を聴いた〕その後、私はどうにかして何か確かな証拠により偽りに陥っているマニ教徒達を打ち負かすことが出来ないか魂を堅く集中させた。もし私が霊的実体を考えることが出来たなら、直ぐにその虚構の全てを解き去り、私の魂から取り去ってしまったであろうが、しかし私はそれを出来なかった。けれども他面では、この世界の構造と肉の感覚の及び得る本性の全てに関して、考察と比較とを続けることで *considerans et comparans* より一層に、多くの哲学者達が考えていることの方が遥かに蓋然的なもの *probabiliora* と判断するようになった。従ってまた、アカデミア派の流儀に従って、一般にそう考えられているよ

うに、全てを疑い全てのもの間を揺れ動きながら、マニ教徒達と別れるべきであると決心した……。 (Conf., 5, 14, 25)

ここでは明確にアカデミア派の懐疑論の強い影響と、それが持つ一定の意義が示されている。

マニ教と哲学者達との見解とを比較して、後者に「より蓋然的なもの *probabiliora*」を看取るアウグスティヌスの態度は、アカデミア派の (3) 蓋然説に従ったものであると言えよう。蓋然説が前提とする懐疑と同意の差し控えがマニ教からの離向に際して有益であったことは先の引用からも明らかであるが、ここではまた新たな視座が登場している。即ち、考察と比較とを続けることで、換言すれば不断に探求を続けることで、複数の事柄の内いずれがより蓋然的であるかという判断基準が得られると規定されているのである。

こうして得られた「より蓋然的なもの」は、今やその信頼性を失ったマニ教の諸教説に代わって従うべき行動規範を構成する。それ故、アカデミア派の懐疑論はアウグスティヌスにとり、単なる不可知論に終わるものではなく、むしろ探求の可能性を切り拓くものとして、マニ教から離れ行く契機であるだけでなく、もう一つの回心へと向かう知的遍歴の第一歩として描かれているのである。

3.2 『告白』第6巻——アカデミア派の肯定的側面とその限界

しかしながら無論、こうしたアカデミア派に対する肯定的評価の一方で、その限界も同じ『告白』において示されている。同書6巻は、アンブロシウスの説教によって次第に聖書の靈的解釈に慣れ親しみつつある30歳当時のアウグスティヌスを描くが、ここでこのアカデミア派の記述は5巻のそれと対照的なものである。

私は……民衆に対するその説教の中で度々アンブロシウスが「文字は殺し、霊は生かす」(II Cor. 3:6) と言うのを喜んで聞いた。彼は文字通りの仕方では逸脱に導かれるように思われるものを神秘的な覆いを取り去って明らかにし、私を躓かせることを言わずにむしろ未だ私が真実であるか否か知らずにいるものを語ったからである。実際、私の心はまっ逆さまに落ちることを恐れてあらゆる同意から離れていたものであり、この留保によって殺されていたのである。(Conf., 6, 4, 6)

確かにこの当時アウグスティヌスは「既にカトリックの教えを上位に置いていた」が (Conf., 6, 5, 7)、それは「より蓋然的なもの」としてであった。「より蓋然的なもの」を導出する考察と比較のプロセスは、もしアカデミア派が主張するように人が確実なものに決して到達しないとすれば、終端に行き着くことのない循環的なプロセスであると言えよう。そしてそこで得られる結論は、それが蓋然的である限りにおいて、決して最終的な同意を許すものではない。それ故、同意差し控えの勧告は、確かにマニ教から離れる上では有効であったが、一方で何らかの信仰へと参与する可能性を閉ざしている

と言える。なぜなら、アウグスティヌス自身が後に明確に述べているように、「同意がなければ、何ももの信じられることはない」からである (*Ench.*, 7, 20)。その限りで彼は「留保によって殺されていた」と言える⁹。

次のアウグスティヌスの独白は、その反語的な表現によって、この当時の彼のアカデミア派に対する両義的な態度を明らかにしている。

明日こそ私は〔知恵 *sapientia* を〕見つけるだろう。見よ、明らかなものが現れて、私はそれを掴むことだろう。見よ、ファウストゥスが来て、全てを説明してくれるだろう。ああ、アカデミア派の人々は本当に偉大なことだ。送るべき生の為のいかなる確実なものも把握されることは出来ないのだ。むしろ我々はより熱心に探求して、絶望しないようにしよう。見よ、教会の書物の中で、以前は不条理に思えたものは既に不条理ではなく、別の仕方で見事に理解され得るのである。明白な真理が見出される迄、少年が両親によってそこに置かれたあの段階に歩を留めておこう。
(*Conf.*, 6, 11, 18)

この最後の一節は『告白』5巻の最後にある「それ故私は、自らがそこに進路を定め置くことが可能な何か確実なものが輝き出る迄、両親が私に勧めたカトリック教会内の洗礼志願者でいようと決めたのである」(*Conf.*, 5, 14, 25) という一節に対応する。マニ教かニカエア・キリスト教か、アウグスティヌスはここでアカデミア派の懐疑を通して両者を天秤にかけているが¹⁰、同書7巻で語られる新プラトン主義との邂逅とマニ教からの最終的訣別は未だ将来の出来事であり、アンブロシウスの説教は依然決定的な転機とはなっていない。但し、アカデミア派の蓋然説の肯定的側面としての考察と比較とによる絶え間のない探求は、ここで聖書の探求を促し、漸次的な霊的進歩の様子を示している。絶望を回避し、聖書の新たな霊的理解が見出されるのは、まさにこの探求においてなのである。

しかし5巻での対応箇所にある「確実なもの」という表現が「明白な真理」という言葉に言い換えられているように、アウグスティヌスはここで行為基準の確実性を「蓋然なもの」あるいは「似真的なもの」を越え出た所に求めている。従ってここには新たに、蓋然説の根底にある把握不可能性の主張に対する批判と、その克服への希求が看取されると言えるだろう。記述のこうした変化は、アウグスティヌスの内面の変化を意味しており、続く『告白』7巻での新プラトン主義との邂逅とそれに付随する不変なるものの認識とを予感させるものである。

実際『告白』7巻において彼は「これはこう在るべきであり、それはこう在るべきではない」という判断の基準を問い尋ねる中で「不変にして真なる真理の永遠性を見出したのであり、「いかなる疑いもなしに *sine nulla dubitatione* 不変なるものが可変的なものに優ると叫び、この不変なるものを「何らかの仕方では知らなかったのならいかなる仕方でも不変なるものが可変的なものに対して確実に優るとはしなかったであろう」と述べている (*Conf.*, 7, 17, 23)。アカデミア派の懐疑はここに克服されることになるのである¹¹。

探求の可能性を確保するという点でアカデミア派の懐疑主義は確かに一定の意義を有するが、その探求の可能性を把握不可能性という公理から導くことに限界があるとアウグスティヌスは考えている。そしてまさにその点で、以下に見る『アカデミア派駁論』での彼によるアカデミア派の哲学史的な位置づけは重要である。

4 アウグスティヌスによるアカデミア派の哲学史的な位置づけ

『アカデミア派駁論』でアウグスティヌスはアカデミア派懐疑論の擁護者として登場させた友人アリピウスの口を借りて、古アカデミア派と新アカデミア派との区別について「新アカデミア派の分離は、古アカデミア派の学説に対立して生じたというより、むしろストア派に対立して決定的になった」とした上で、(1)の把握不可能性の主張が「古アカデミア派となんら争い合うものではなく……ソクラテス自身やプラトンおよび他の古人の権威によっても容易に認められる」と語らせている¹²。

このストア派という対立軸こそ、アウグスティヌスのアカデミア派理解の根底に在るものであり、(1)の把握不可能性の主張が如何にして登場したかを、彼は次のように物語る。

アウグスティヌスによれば、ストア派の祖ゼノン (335 BCE–263 BCE) はアカデミアの第四代学頭ポレモンの下で学んだが、この時既にゼノンは「何か別の学説を聴聞して信じていた」。相弟子でありアカデミアの学頭を継いだアルケシラオスが「ポレモンの教えに従った」と言われるのに対し、ゼノンは「この可感覺的世界以外には何もものも存在せず、この世界ではすべてのものは物体以外の何ものによっても動かされない」のみならず、「神自身でさえ火であると考え」たとされる (CA, 3, 17, 38)¹³。

これに対してアルケシラオスは、「この悪」即ちゼノンの説が「次第に広く広まりつつある時」、プラトンの教えを「いつか後世の人々によって見出される黄金のように埋めて隠し」、「物的なものに対する親近さによって、一切は物的なものであるということが安易に、しかし有害な仕方」で信じる人々に対して「反対のことを教えること *dedocere*」を決めたのである。そして「ここから新アカデミア派に帰されているかの一切の教説」即ち把握不可能性の主張が提出されるに至ったのである (CA, 3, 17, 38)。

注目すべきは、ここでアウグスティヌスがアリピウスの主張する、アカデミア派の把握不可能性の主張が古アカデミア派にまで遡るといふ説を退け、それをあくまでストア派に対する対人論法として位置づけている点である。

既に見たように彼にとり、アカデミア派の (2) 同意差し控えの勧告や (3) 蓋然説は、究極的には (1) 把握不可能性の主張へと帰されるものであった。従ってカルネアデスに帰される蓋然性についての議論もまた、同様にストア派に対する対人論法として捉えられることになる (CA, 3, 18, 40)。その点で新アカデミア派の主張はアウグスティヌスにとり、両派の論争がアカデミア派の勝利によって終わるのなら取り下げられ、再びプラトンの教えへと回帰し得るものであったと言える。

事実、アウグスティヌスはキケロの師であったラリッサのフィロンを「きわめて慎重

な人」と評し、「降伏した敵」即ちストア派に対して「門を開きにかかり、アカデミアをプラトンの権威と教えとの下へ呼び戻し始めた」と記している (CA, 3, 18, 41)。しかしフィロンの弟子であると共にストア派に学んだアンティオコスがアカデミア派に「ストア派の燃えさしからある悪を持ち込」もうとした為に、両派の論争はさらにキケロの時代にまで続くこととなったのであり、「哲学のうちで最も純化され最も光に満ちた」プラトンの哲学は、最終的にプロティノスにおいて再び「誤謬という雲を破って現れ」ることになるのである (CA, 3, 18, 41)。

新アカデミア派の独創性や倫理上の蓋然説が念頭に置いた生の探求への問いを等閑に付し、プラトンの教えが「出来る限り受け継がれ秘儀として守られてきた」(CA, 3, 17, 38)とするこうした哲学史理解は、現代の視点からは決して肯んぜられるものではないが、しかし、回心直後のアウグスティヌスによるアカデミア派理解として注目するに値すると言えよう。なぜなら、この点こそ彼のアカデミア派に対する両義的な態度を説明するものであると思われるからである。

新アカデミア派は、「黄金」たるプラトンの教えを<保存し>、プロティノスにおいて再びその本来の姿を<取り戻す>ことを可能ならしめる一つの回路として描かれている。しかしまた彼らは、その「黄金」を保存する為に、懐疑という覆いの下に「埋めて隠し」たのであり、その限りで、「プラトンその人の本来の教え」である新プラトン主義が復興された今、この懐疑主義はその本質において取り去られるべきものとして現れてくるのである。

5 アカデミア派懐疑論の『告白』における構造論的役割

以上の諸点を踏まえた上で、改めてアカデミア派の懐疑主義が『告白』1-9巻で語られるアウグスティヌスの半生の物語の中でどのように位置づけられるか、構造論的観点から見てみることにしたい。

O'Meara (2001 [1954]) と Knauer (1957) の説を受けて O'Connell (1969, pp. 11-12) は、『告白』の物語を、至福なる神の観照から離れて、即ちその本来の在り方から離れて、この世界の内をさま迷っている魂が再び神を見出すまでの「魂の遍歴 peregrinatio animae」であると規定した。このように見る時『告白』1-9巻で語られるアウグスティヌスの過去に関わる自伝的記述は、8巻のキリスト教への回心を軸にした知的内省的な物語として捉えられる。一方加藤 (2006, pp. 89-90) は、魂の遍歴の動的な側面に着目し、母モニカの下での素朴な幼少期のキリスト教信仰が語られる1巻と、遍歴を経た後の壮年期の成熟したキリスト教信仰と母モニカの死が語られる9巻が対称的構造を有していることを示した上で、その間に挟まれた2-4巻と5-8巻がそれぞれ離向 *auersio* と帰向 *conuersio* の過程を描いていることを指摘した¹⁴。

宮本 (2009) はこの加藤の指摘を受け、『告白』1-9巻の各巻がキアスムス的構造を形成していることを明らかにした¹⁵。キアスムス即ち交差配列法は、より大きな効果を狙って互いに関連する二つ以上の節を反転した構造によって結びつける修辞法の一つである。

各節は平行構造を有し、最も単純な形としては<AB (交差点) B'A'>という形をとる。キケロやセネカといったラテン文学だけでなく、旧約新約両聖書の内にもその用例が見出される。

宮本に従い『告白』1-9巻の各巻の構造を示すならば、次の表の様になる¹⁶。

(A)	1巻	修辞学の学習		(1-15歳)
		母モニカの信仰と受洗の延期		
(B)	2巻	悪しき仲間との交際		(16歳)
		「梨の木の実」の盗み		
(C)	3巻	『ホルテンシウス』体験と聖書への失望		(17-19歳)
		マニ教への入信		
(D)	4巻	内縁の女性との出会い		(19-28歳)
		物的なものに囚われ霊的なものを見ない		
(E)	5巻	ファウストゥスとの邂逅と失望		(29歳)
		アカデミア派の懐疑主義への傾倒		
		ミラノでのアンブロシウスの説教		
(D')	6巻	アンブロシウスによる聖書の霊的意味の開示		(30歳)
		内縁の女性との別れ		
(C')	7巻	新プラトン主義との出会いと聖書の研究		(31歳)
		マニ教との最終的訣別		
(B')	8巻	善き仲間との交際		(32歳)
		「無花果の木」の下での庭園の回心		
(A')	9巻	修辞学教師を退く		(33歳)
		受洗と母モニカと共なる信仰		

ここから『告白』1-9巻の各巻が、(E)を交差点として(A)から(D)の離向の過程と(D')から(A')の帰向の過程から成るキアスムスの構造を為していることが理解されよう。

本稿の関心にとり重要な点は、アカデミア派の懐疑主義について最初に語られる(E)、即ち『告白』5巻が全体の交差点として配されていること、そしてまた、5巻内部においても、マニ教の教師ファウストゥスとミラノの司教アンブロシウスという、マニ教とキリスト教の二人の時代を代表する人物との出会いの間にアカデミア派への傾倒が位置づけられている点である。

上記の構造を、キリスト教への回心という観点からではなく、マニ教への回心という観点から見れば、(C)から(D)はマニ教の教義に対する習熟の過程を(D')から(C')はマニ教教義からの逸脱の過程を、物的なものと霊的なものそれぞれの探求によって描き出していると言える。

既述の様に、マニ教徒であったアウグスティヌスをファウストゥスとの面会に駆り立てたのは、哲学者達の自然学的知識とマニ教の提供する可感覚的世界についての教えとの間の矛盾の解消をこの著名なマニ教の指導者に求めたからであった。しかし決定的な回答が得られない為、アウグスティヌスは自らが求めてきたマニ教に対する同意を留保し、蓋然説から導かれる不断の探求へと心を向けるのである。そしてその結果として、アンブロシウスで示された靈的なものの探求へと進む。その限りで、構造論的には、マニ教とキリスト教、この二つの信仰の間の二重の離向と帰向との過程をアカデミア派の懐疑論はあたかも蝶つがいの如くに繋ぎ合わせる役割を担っていると言えよう。

文学上の効果という点からは、この役割は決して小さなものではない。そして『告白』という物語から接近し得る限りの、我々のアウグスティヌスの半生においては、それは決定的なものでさえあり得る。実際、もしアカデミア派という要素がなかったとしたならば、恐らくアンブロシウスの影響は『告白』で描かれているものよりもずっと小さなものであったであろう。なぜなら、彼は最初からこのミラノの司教の語ることを理解したのではなく、「まずは私には弁護され得るように思え始めた」に過ぎないからである (Conf., 5, 14, 24)。29歳当時のアウグスティヌスは靈的な進歩を必要としていたのであり、更なる探求を必要としていた。そして『告白』1-9巻の構造上、アカデミア派の懐疑主義は、自らのそれまでの立場に囚われないこうした自由な探求の可能性を保障するものとして、立ち現れて来るのである。

6 まとめ

以上の議論から、本論はアカデミア派の懐疑論が『告白』という著作の上で両義的な役割を与えられていると結論づける。アウグスティヌスにとりアカデミア派の懐疑論それ自体が新プラトン主義の前に克服されるべきものであったことは疑いえない。しかし他面においてそれは、聖書の靈的解釈へと進む可能性を開拓し新プラトン主義的キリスト教理解への知的発展を促したものとして描かれている。それ故『告白』の読解に際しては、従来見逃されがちであった、アカデミア派の蓋然説より齎されるこの自由な探求の可能性についてより一層注意する必要があるように思われる¹⁷。

【略号】

底本として以下のテキストを用いた。

引用に際しては以下に挙げた邦訳書ならびに英訳・仏語訳を参照しつつ、適宜改変を加えてある。

アウグスティヌス Augustinus

CA: Contra academicos (『アカデミア派駁論』)

Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum (=CSEL) v. 63, Sancti Aureli Augustini opera, s. 1, p. 3,

Contra academicos libri tres ..., recensvit Pius Knöll, New York: Johnson Reprint, reprint 1962 [1922].

「アカデミア派駁論」清水正照訳、『初期哲学論集 (1)』(アウグスティヌス著作集1) 教文館, 第3版 1992 [1979].

Conf.: Confessiones (『告白』)

Bibliothèque Augustinienne, Œuvres de saint Augustin (=BA) 13–14, *Les Confessions*, texte de l'édition de M. Skutella, intr. et notes A. Solignac, trad. E. Tréhorel et G. Bouissou, Paris: Desclée de Brouwer, 1962.

「告白」山田晶訳, 山田晶編『世界の名著 14 アウグスティヌス』中央公論社, 1968.

『告白』上下巻, 服部栄次郎訳, 岩波文庫, 改訳版 1976.

『告白録』上下巻 (アウグスティヌス著作集 5/1–2) 宮谷宣史訳, 教文館, 1993–2007.

Ench.: Enchiridion (『エンキリディオン』)

BA 9, *Exposés généraux de la foi: ... Enchiridion*, texte, trad. et notes par J. Rivière, Paris: DDB, 1947.

「信仰・希望・愛 (エンキリディオン)」赤木善光訳、『神学論集』(アウグスティヌス著作集4) 教文館, 第6版 1995 [1979].

Faust.: Contra Faustum Manichaeum (『ファウストゥス駁論』)

CSEL 25-1, Sancti Aureli Augustini opera, s.6, p.1, ... *Contra Faustum Manichaeum*, ed. J. Zycha, NY: Johnson Reprint, reprint 1972 [1891].

The Works of Saint Augustine: A Translation for the 21st century, p. 1, v. 20, *Answer to Faustus, a Manichean*, intr. trans. and notes Ronald Teske, Brooklyn: New City Press, 2007.

UC: De utilitate credendi (『信の効用について』)

BA 8, *La foi chrétienne: ... De utilitate credendi ...*, texte de l'édition bénédictine, intr., trad. et notes J. Pegon, Paris: DDB, 1951.

「信の効用」赤木善光訳、『神学論集』(アウグスティヌス著作集4) 教文館, 第6版 1995 [1979].

エウゼビオス Eusebios

EP: Evangelica Praeparatio (『福音の準備』)

Sources chrétiennes, 206, 215, 228, 262, 266, 292, 307, 338, 369, *La préparation évangélique*, 9 vols., intr., texte grec, trad. et comm. Jean Sirinelli et Édouard des Places, Paris: Éditions du Cerf, 1974–1991.

キケロ Marcus Tullius Cicero

Acad. post.: Academica posteriora (『アカデミカ後書』)

Cicero, *Academica posteriora: Liber 1*, ed., intr. et com. Michel Ruch, Paris: PUF, 1970.

セクストス・エンペイリコス Sextus Empiricus

PH: Pyrrhoniae hypotyposes (『ピュロン主義哲学の概要』)

Bibliotheca Teubneriana, Sexti Empirici Opera, v. 1, *Pyrrhoneion Hypotyposeon*, recensvit Hermannus Mutschmann, Lipsiae: Teubneri, 1912.

『ピュロン主義哲学の概要』金山弥平, 金山万里子訳 (西洋古典叢書) 京都大学学術出版会, 1998.

【参考文献】

- BeDuhn 2009 BeDuhn, Jason David, *Augustine's Manichaean Dilemma; t. 1: Conversion and Apostasy*, 373–388 C.E., Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 2009.
- Courcelle 1968 [1950] Courcelle, Pierre P., *Recherches sur les Confessions de Saint Augustin*, Paris: Éditions E. de Boccard, nouvelle éd. 1968 [1950].
- Gilson 1969 [1931] Gilson, Étienne, *Introduction à l'étude de Saint Augustin*, 4^{ème} éd., Paris: J. Vrin, 1969 [1931].
- Knauer 1957 Knauer, G. N., "Peregrinatio Animae: zur Frage der Einheit der Konfessionmen," *Hermes*, 85, pp. 216–248, 1957.
- Lancel 1999 Lancel, Serge, *Saint Augustin*, Paris: Fayard, 1999.
- O'Connell 1969 O'Connell, R. J., *St. Augustine's Confessions: the Odyssey of Soul*, Cambridge: Harvard U. P., 1969.
- O'Donnell 1992 O'Donnell, J. J., *Augustine, Confessions; Text and commentary*, 3 vols., Oxford: Clarendon Press, 1992.
- O'Meara 2001 [1954] O'Meara, John J., *The Young Augustine: the Growth of St. Augustine's Mind up to His Conversion*, NY: Alba House, 2nd and revised ed. 2001 [1954].
- 岡部 1996 岡部由紀子「アウグスティヌスのプロバビリズム批判」『銀杏学園紀要』20, pp. 91–113, 1996.
- 加藤 2006 加藤信朗『アウグスティヌス『告白録』講義』知泉書館、2006.
- 清水 1992 [1972] 『アウグスティヌス著作集 1 初期哲学論集 (1)』清水正照訳, 教文館, 第三版 1992 [1979].
- 田中 2001 田中龍山「アウグスティヌス『アカデミア派論駁』における懐疑論批判——「もっともらしいもの (probabile)」概念の再考——」『中世哲学研究』20, pp. 23–41, 2001.
- 宮本 2009 宮本久雄「アウグスティヌス文学のヘブライ的地平——『告白録』第一～第九巻における「キアスムス (交差対応的配列法)」構造——」『パトリスティカ』13, pp. 142–148, 2009.
- 山田 2010 山田庄太郎「アウグスティヌスのストア的術語の用法について——『告白』11巻 23章における communes notitiae の語を巡って——」『宗教学・比較思想学論集』11, pp. 83–95, 2010.

【註】

¹ 新アカデミア派の問題をこのようにいわば等閑に付しているのは、O'Meara (2001 [1954], p. 50) が「マニ教徒の教えを十分に知ることなくしては、アウグスティヌスの精神ないし回心を理解しようと望むことが出来ないのは明らか」と述べていることを考えると、奇妙なことのようにも思える。なぜなら以下で本稿が論じるように、新アカデミア派への傾倒は、彼のマニ教からの回心において、重要な役割を果たしているからである。

² 但し Lancel は、本稿が論じるような、アカデミア派の懐疑主義が持つ肯定的・否定的側面の両面を明確に捉えているとは言い難い。

³ 『アカデミア派駁論』ではキケロ (106 BCE–43 BCE) からの影響が際立っている。一方『神の国』ではヴァロ (116 BCE–27 BCE) の影響が強い。

⁴ アウグスティヌスが「アカデミア派」と言う時、常にこの懐疑主義によって特徴づけられる「新アカデミア派」が念頭にある。本稿では彼の用法に倣い特に「新アカデミア派」という用語を用いず「アカデミア派」の語によってこれを指すこととする。

⁵ アウグスティヌスによる「蓋然的なもの」の定義については CA, 2, 11, 26 を参照。同概念に関する研究として、岡部 (1996) ならびに田中 (2001) を参照。

⁶ 同書は現在失われており、断片のみが伝えられる。

⁷ ファウストゥスは異教からの改宗者であり (*Faust.*, 9, 1; 13, 1; 15, 1)、アウグスティヌスよりおよそ 20 年程年長であったと思われる。マニ教教団の中では「教師」と呼ばれる地位にあり、この地位にあった者は当時ペルシアや西アジアにまで広まったマニ教の中でも 72 名に過ぎず、ローマ帝国内では 12 名を越えなかったであろうと推測される (BeDuhn, 2009, p. 108)。

⁸ アウグスティヌスはファウストゥスの人柄自体には賛辞を送っており、その失望はあくまで哲学と信仰の調和が当初の期待に反して後者の内に見出せなかったことに基礎を置いている点に注意を促したい。なお BeDuhn (2009, p. 107 note 5) が指摘するように「キケロのいくつかの演説と、ごくわずかのセネカの書」という表現はファウストゥスの教養に対する修辭的極小化であり、ファウストゥスがより広範にこうしたラテン語著述家の書物に親しんでいたことは疑いえない。興味深い指摘として O'Donnell (1999, vol. 2, p. 301) は、ファウストゥスのキリスト教批判が、セネカの『迷信について *De superstitione*』から影響を受けたものである可能性を挙げており、またファウストゥスを通じてアウグスティヌスが同書を知ったのではないかと推測を提示している。

⁹ 田中 (2001, pp.38–39) は『アカデミア派駁論』における *probabile* 概念を巡るその論文の中で同様の結論に達している。

¹⁰ 我々はアカデミア派それ自体が、彼の選択肢の中に含まれていないことに注意すべきである。資料面での制約もありローマ帝国内のマニ教について確言することは難しいが、幼少期の母モニカから薫陶を受け慣れ親しんできたキリスト教の影響を考えると、彼のマニ教とニカエア・キリスト教への二つの回心は、「キリスト教」という大きな枠組みの中で展開した可能性が高い。Courcelle (1968 [1950]) はアウグスティヌスの新プラトン主義受容があくまでキリスト教的新プラトン主義の文脈に則したものであったことを明らかにした。それと同様に新アカデミア派やストアといった種々の哲学的要素の影響もまたキ

リスト教理解の為の一つの道具であったように思われる。従って、恐らく「懐疑主義への回心」といった事態は、アウグスティヌスにとり想定されさえしなかったであろう。

¹¹ ここでもまた判断基準の探求が不変なるものの認識の端緒となっている点に注意を促したい。

¹² 同様の理解がキケロの『アカデミカ』にも見られる (cf. Cicero, *Acad. post.*, 12, 46)。

¹³ アウグスティヌスはストア派の問題点を、存在するものは全て物体である、という彼らの有名な公理に求めていた (山田 2010, p. 91)。また彼は、マニ教の問題点の一つに、マニ教の持つ「物質主義 *matérialisme*」を看取っている (Gilson, 1969 [1931], pp. 246–247)。この点について『アカデミア派駁論』の邦訳者である清水 (1992 [1979], pp. 516–517) は、「マニ教＝ストア派」と置き換えてみると、ファウストゥスに失望しアカデミア派の懐疑論へと傾倒した 29 歳当時の「アウグスティヌスの精神状況を理解するのに有効な図式を得ることができる」と述べ、「マニ教徒に虚偽を認めさせる」為の有力な方法の一つにアカデミア派の懐疑があったのではないかという興味深い指摘をしている。

¹⁴ 加藤 (2006, pp. 90–91) はこうした解釈を、1 巻を幼少期の自己愛と少年期の悪行として捉え、2–6 巻を放蕩とマニ教への転落と懐疑主義への傾倒、7–8 巻を知性と意志との回心として理解する「哲学的彷徨型の読解」に対して、「構成的解釈」と呼び、その利点を、(1) 1 巻と 9 巻との位置づけ (2) 母モニカの意味 (3) 均衡ある構成 (4) その他の文献学的根拠の諸点をより明瞭にし得ることにあると述べている。しかしこの「構成的解釈」の最大の貢献は、帰向への転換点として『告白』1–9 巻の中での 5 巻の重要性に光を当てたことにあるように思われる。

¹⁵ 宮本 (2009, p. 148) はこのキアスムス構造を「アウグスティヌスの言語表現」における「聖書的ヘブライック的言語用法」として位置づけている。しかしながら、この修辞技法それ自体はキケロやセネカにも見出し得るものであり、ラテン語著述家からの影響についても考慮に入れるべきであるように思われる。

¹⁶ 以下の記述は宮本 (2009, p. 145) の構造図に基づいたものであるが、一部の記述を簡略化し、また本稿に必要と思われる範囲で加筆修正を加えている。

¹⁷ アウグスティヌスは本稿で扱った『告白』5–6 巻のイタリア滞在中の出来事について、『信の効用について』(391–392) の中でも簡潔に言及を加えている。それによればアカデミア派に同調した後、彼は次第に、人間精神についての可能な限りの探求を繰り返す中で「真理が隠れているということを、真理の内に探求の方法が隠されており、まさにその方法が何らかの神的権威から受け取られるべきであるという理由でなくしては、考えないようになった」のであり、当時の課題としては「この権威が何であるかを探求することが残っていた」と言われている。それ故、彼の「魂 *animus* は、多くの人が入り込むのを避ける入り組んだ森の中で、休むことなく、真なるものを見出そうとする欲求によって *cupiditate reperiendi veri* 動かされていた」のである。アウグスティヌスは当時の自らのこうした探求への欲求が、聖書解釈の上での進展を促したことだけでなく、「もし教えることが出来る人が当時の私を見出すなら、当時の私が非常に従順で教えやすい者であるを見出すだろう」と証言している (UC, 8, 20)。

(やまだ・しょうたろう 筑波大学人文社会科学研究所 哲学・思想専攻)